

府中市文化財保護審議会答申について

1 趣旨

令和4年5月に教育委員会から府中市文化財保護審議会へ諮問した
ことについて、令和5年9月29日に答申が提出されましたので報告
するものです。

2 諮問内容

府中市文化財の指定について

3 内容

諮問を受け当該審議会において1年4か月間審議を行い、別添資料
のとおり、府中市文化財として指定されるよう答申を受けました。

(別添) 資料

指定物件の詳細

1 名称

むさしふちゆうきょうど しよずりいっしきおよ げんが
武蔵府中郷土かるた初刷一式及び原画

2 員数

(1) 武蔵府中郷土かるたの初刷

内容は、読み札と取り札各 46 枚の計 92 枚、その予備札 4 枚、あいさつ状 1 枚、項目所在図と内容一覧 1 枚、収納箱 1 合

(2) 赤羽末吉の手描きによる取り札原画 46 枚

3 所在地（保管場所）

府中市南町 6 丁目 32 番地 府中市郷土の森博物館

4 所有者

府中市

5 文化財の種別

府中市有形文化財（歴史資料）

6 品質形状及び寸法

(1) 武蔵府中郷土かるたの初刷

- ・読み札と取り札（予備札含む）

紙製（和紙との合紙）、縦 8.9 センチメートル、横 6.3 センチメートル、厚さ 0.05 センチメートル

- ・あいさつ状

紙製、縦 7.6 センチメートル、横 18.15 センチメートル、二折

- ・項目所在図と内容一覧

紙製、縦 23.65 センチメートル、横 35.15 センチメートル、八折

- ・収納箱

長方形覆蓋造

蓋は紙製、縦 9.7 センチメートル、横 13.9 センチメートル、高さ 1.9 センチメートル、組立て式

身は、紙製、縦 9.5 センチメートル、横 13.5 センチメートル、高さ 2.05 センチメートル、総高 2.05 センチメートル、組立て式

(2) 赤羽末吉の手描きによる取り札原画

紙製（和紙）、水性絵具（一部墨）、縦 8.9 センチメートル、横 6.3 センチ

メートル、厚さ 0.05 センチメートル

7 説明

(1) 概要

本歴史資料は、昭和 48 (1973) 年 1 月に発行され、今日府中市郷土の森博物館に保管される「武蔵府中郷土かるた」(以下、「郷土かるた」という。)の初刷の読み札と取り札各 46 枚の計 92 枚、予備札 4 枚、あいさつ状 1 枚、項目所在図と内容一覧 1 枚、これらを収める収納箱 1 合及び赤羽末吉(あかばすえきち、1910~1990 年)の手描きによる取り札原画 46 枚で構成される。歴史資料であるとともに、教育資料としての価値を有する。また、発行当時のものがほぼ改変もなく、現在に伝えられてきた郷土かるたは、国内でも稀有な例である。

郷土かるたの読み札の句は、府中市の歴史、民俗、伝承、自然、文化財などをテーマに詠まれたもので、その裏面には関連事象のわかりやすい解説が付されている。府中市教育委員会では、今日まで 15 万 6 千組ほどを発行してきた。現在でも、市内小学校の第三学年児童全員に郷土学習資料として配布し、小中学校のふるさと府中学習の教材として活用されている。

(2) 郷土かるた制作の趣旨、作成の経過及び活用の取組

郷土かるたの制作の趣旨は、昭和 46 (1971) 年 10 月 29 日開催の第 1 回作製準備委員会記録によると、府中市は国府が置かれた歴史の町で、市民や子どもたちの郷土愛の醸成を願って、やさしく明るく口ずさめ、親しめる郷土府中のいろはかるたを制作する、とある。

昭和 29 (1954) 年に 1 町 2 村が合併して新たに府中市が誕生した。新しい市としての一体感を企図して、さらに 8 年後の昭和 36 (1961) 年には市史編さん事業が開始されたこともあり、次代を担う子どもたちが楽しみながら、郷土の歴史や伝統文化に親しめる教材が求められた。

読み札の作製は、810 枚の市民公募等の文案から調整された。

取り札である絵札の原画は、赤羽末吉の手描きによる。赤羽末吉が昭和 26 (1951) 年から昭和 45 (1970) 年までの 20 年間、府中市民であったことなどの理由で選ばれたものと考えられる。赤羽末吉は、現在でも、多くの子どもたちに親しまれている絵本「スーホの白い馬」や「笠地蔵」などで知られる日本の絵本画家で、海外からも高い評価を得て、国際アンデルセン賞画家賞を受賞している。その美術的価値とともに、優雅であじわいのある絵の魅力も、郷土かるたが多くの市民に親しまれてきたことにつながっている。

市の教育委員会では、昭和 48 年に「郷土かるた展」を開催するとともに、「郷土かるためぐり」標識・標柱 48 本を各読み札の関連場所に設置し、現地散策を呼び掛けた。その結果、現在でも、夏休みの自由研究などで、親子で標識巡りをすることも恒例となっている。また、小中学校とも総合的な学習で取りあげるほか、かるた大会などを実施し、郷土学習の教材としてき

た。

さらに、郷土の森博物館主催の展示会や府中市の遺産の活用を考える会による武蔵府中郷土かるた選手権大会なども開催されてきた。

このように、これまで長きにわたって、市民とともに郷土かるたの普及・啓発に努めてきたことがわかる。

郷土かるたは、過去 50 年間のみならず今後も、郷土学習のための学校教育資料と位置づけられるだけでなく、府中の長い歴史と伝統が反映された貴重な文化財として高い価値を有する。さらに、郷土の歴史に対する関心と、本市に愛着を感じてもらふ重要なアイテムであり、市民共有の財産となっている。よって、将来に亘って永く保存し、活用すべき文化財と思料される。

8 他の法令による制限

特になし。

9 参考文献

府中市教育委員会『武蔵府中 郷土かるためぐり』昭和 59 年 11 月

府中市『府中市政史』平成 5 年 3 月

府中市教育委員会『府中市教育史』下、平成 14 年 12 月

府中市の遺産の活用を考える会『武蔵府中郷土かるた解説書』平成 30 年 11 月

赤羽茂乃『絵本画家 赤羽末吉 スーホの草原にかける虹』福音館書店、令和 2 年 4 月

小野一之「宮本常一が府中から考えた観光のこと、博物館のこと」『あるむぜお』No.134 府中市郷土の森博物館、令和 2 年 12 月

松本三喜夫「武蔵府中郷土かるた」と赤羽末吉『新府中市史研究 武蔵府中を考える』第 4 号 府中市史編集委員会・府中市、令和 4 年 2 月

府中市『新府中市史 近現代 資料編』下、令和 4 年 3 月

10 指定後の方針

指定後は、郷土かるたの文化的・歴史的価値を将来に亘って永く維持するために、初刷一式と原画の保存を図る。さらに、学校教育や多くの市民に広く利用されるべく、活用を推進していく。

○指定基準

府中市文化財の指定、登録及び選定に関する基準（抜粋）

第 1 府中市指定文化財

1 府中市指定有形文化財

(6) 歴史資料

ウ 歴史上重要な事象及び人物に関する遺品で、歴史的又は系統的にまとまって伝存し、地域的又は学術的価値の高いもの

武蔵府中郷土かるた初刷
読み札・読み札裏面解説・取り札・赤羽末吉の取り札原画（左から配列）

図1-1 いの札

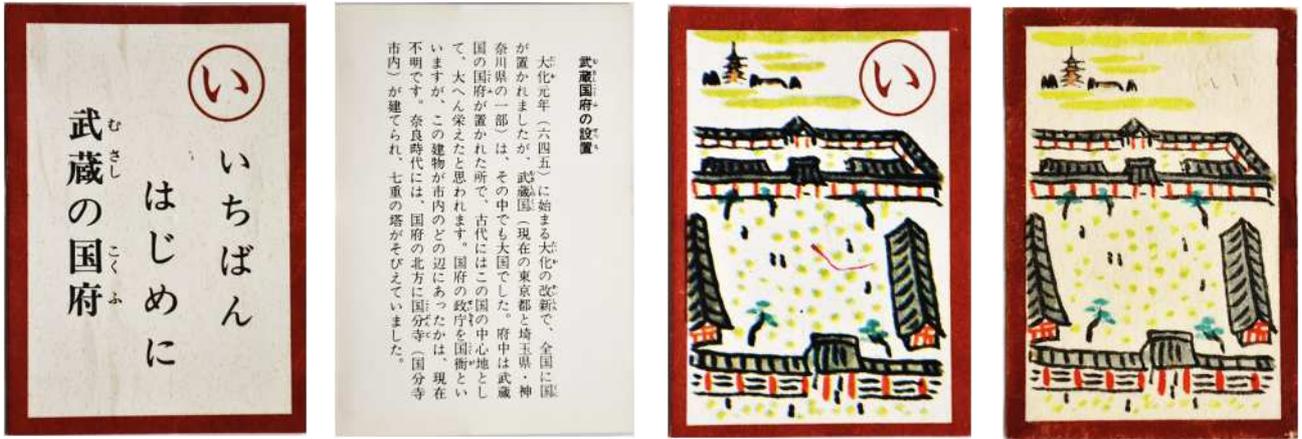


図1-2 ろの札



図1-3 はの札



図1-4 にの札



図1-5 ほの札



図1-6 への札

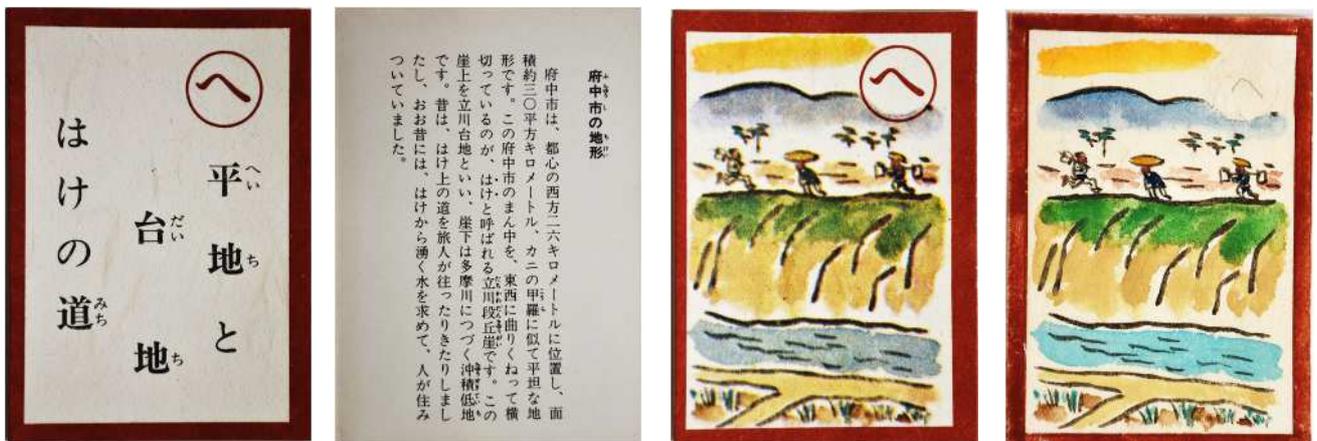
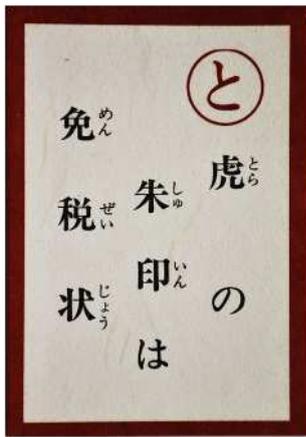


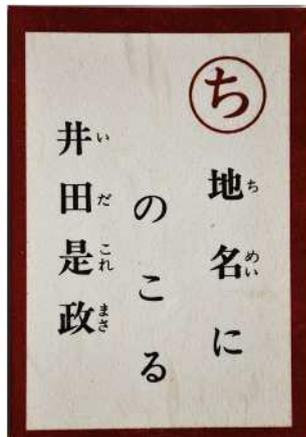
図1-7 との札



小田原北条免稅朱印状 市郷土資料
片町の高安寺に伝えられている文書で、弘治二年（一五五七）に北条氏康が高安寺保護のため、横別戸數割稅を免稅した指令書です。虎の姿を彫りこんだ朱印が押してあるところから、俗に「虎の御柳の御朱印」ともいわれ、簡潔な文面は、小田原北条氏の政治の一端を知ることのできる貴重な資料です。



図1-8 ちの札



井田探守是政 墓・都田跡
井田氏は、承応によると龜山重忠を祖先として、是政のころ小田原北条氏に属していましたが、天正八年（一五九〇）の小田原城・八王子城の落城のち、府中に移り住んだといわれます。現在の是政の地名は、これに由来すると伝えられますが、墓地からは元弘三年（一三三三）の板碑も出ており、井田氏は、鎌倉時代ごろからの土着の豪族と思われれます。是政の墓は、東京競馬場の馬場の中にあります。



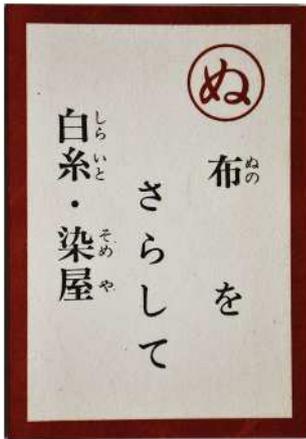
図1-9 りの札



関良雪 自画像軸・市重宝
関良雪は、六所宮の神官である鹿島郡泉守藤原正當の子で、元禄一六年（一七〇三）に生まれました。良雪は、三〇余才で神宮をやめて江戸に出て、一家をなした画人で、水墨画に長じています。現在、上野の精養軒の近くに記念碑があります。安永四年（一七七五）に七二才で亡くなりました。墓は、本町の妙光院にあります。



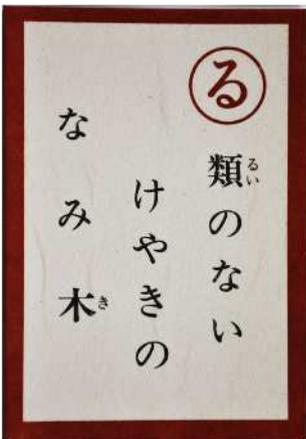
図1-10 めの札



古い地名
現在では、町名改正で古い地名が少なくなりましたが、元来、地名の多くは、郷土の歴史と関係があるものです。白糸・染屋も、それぞれ村名ですが、多摩川と関連して「てづくりぬ」の糸をつむいだり、織ったり、染めたりした所であることに由来しています。芥菜染の東歌に「多摩川にさらすてづくりさらさらは何ぞこの児のこいだ愛しき」という相聞歌があり、多摩川の布さらしを認ばせす。



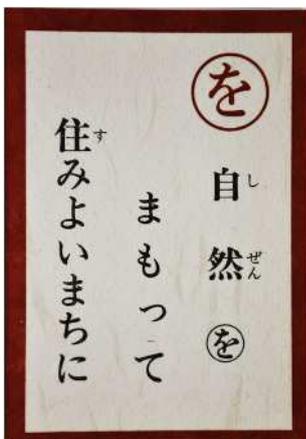
図1-11 るの札



馬場大門標並木 国天然記念物
標並木は、大國魂神社の表参道で、その両側が馬場になっていました。康平五年（一〇六二）に前九年の役平定の帰途、源頼義、家光父子が、標の苗（〇〇〇本を寄進したのに始まる）といわれます。しかし、現在の並木は徳川家康・家光等が主として補植整備したもので、特に家康は、関が原・大坂の両役の戦勝後、報恩として馬場を献納し、標を補植しました。並木の四季の景観はすばらしく、とりわけ新緑のころは緑のトンネルとなり、府中市のシンボルです。



図1-12 をの札



標の町づくり
むらさき匂うとうたわれた武蔵野も、昔語りとなってしまいました。府中市には、まだ豊かな武蔵野の面影が残っています。この自然を守るために、府中市では昭和四五年から自然調査を行ない、また、昭和四七年から自然保護条例が施行されるとともに、環境保全の市民会議も発足しました。歴史に住み、自然に住む、そういう町でありたいものです。「郷土を愛し自然にたしき美しい町をつくりましょう」（市民憲章から）



図1-13 わの札



和算は、中国から伝わった数学を、改良発展させてきた日本独自の数学で、江戸時代前期に、関孝和が新しい算法を創造しました。以後和算は、ほとんど孝和の系統で発展普及しました。府中とその近辺にも、関流数学を学ぶ者が多く、大國神社に奉納された和算額は、小俣勇の門下生たちが、明治一八年（一八八五）に奉納したもので、全国に数ある額の中でも立派なものです。孝和は、少年時代を府中（本宿町と思われる）で過ごしています。

関流和算の奉納額



図1-14 かの札



高札場 郡田跡

高札は、禁制や法令などを一般庶民に伝えるために、街頭高く掲示した板で、中世末期に起ったが江戸時代に最も盛んに行なわれ、明治三年（一八七〇）まで残りました。高札を掲げる場所を高札場といいますが、四つ辻にかけられたことから、俗に「札の辻」ともいわれました。現在、宮西町に残っている高札場は、府中宿の甲州街道と鎌倉街道の交差点にあります。その大ききからも貴重な資料です。



図1-15 よの札

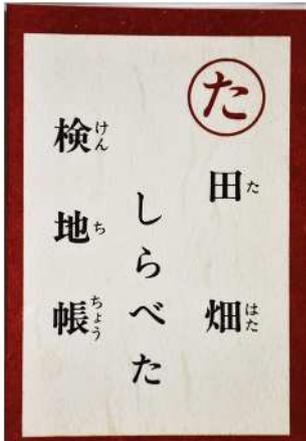


鹿島神社懸仏 市重宝

懸仏は、古くは御正体といひ、神社に奉獻する神鏡が起源ですが、次第に変化したものと思われれます。懸仏という名は、円形の銅板に小仏像をかけることからそう呼ばれます。是政の鹿島神社にある懸仏は、銅板に弘安七年（一八四〇）の銘があり、武蔵七党のうちの西党日泰氏に關係が深いようです。近くには横山屋敷と呼ばれるものもあり、鹿島神社は、横山安の人びとによって祀られていたと思われれます。



図1-16 たの札



〔大正一八年と文禄三年の検地帳〕 市重宝
 検地帳は、水田・畑・草場などといわれ、田畑の等級・面積・石高・作人などを、村単位にまとめた土地台帳で、年貢課税の負担の基準となつたものです。府中市に現存する最古のものは、徳川家康が江戸入府後、始めて行つた、いわゆる大開帳に類する天正一八年の検地帳と、これに続く文禄三年の検地帳で、検地の移り変わりを知らうえの資料となっています。

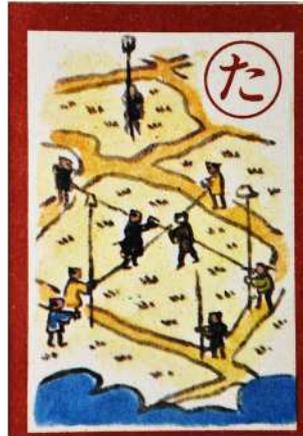


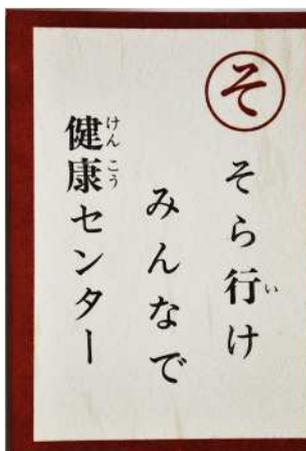
図1-17 れの札



多磨霊園
 多磨霊園は、大正一二年（一九二二）に開設され、面積一三二平方キロメートル、日本最大の公園墓地です。与謝野鉄幹・品子や北原白秋・吉川英治など、多数の文化人をはじめ二六万の霊が、武蔵野の景観をとりいれた林間に、安らかに埋葬されています。春の桜、秋の紅葉に彩られる木立ちの中に、昔ながらの赤松の巨木が、ひととき目につきます。ここはまた野鳥が多く、そのさえずりは、お参りのの人たちを楽しませています。



図1-18 その札



住みたくなる町
 府中市が誕生したのは、昭和二九年（一九五四）です。その後、建設の響きは休むことなく、「住みたくなる町」を旨として躍進しています。土木・建設・民生・衛生・教育・文化・福祉などの充実のもとより、最近ではスポーツ・レクリエーション施設が整備されてきました。矢崎町と多摩川の川原に広がる市民健康センターは、市民の憩いの場所です。すでに交通遊園や総合体育館・総合プール・各種競技グラウンドなどが完成しています。

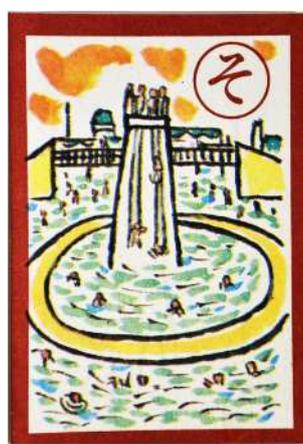


図1-19 つの札



図1-20 ねの札



図1-21 なの札



図1 22 らの札



図1 - 23 むの札



図1 - 24 うの札



図1 - 25 のの札



図1 - 26 おの札



図1 27 く の札



図1 28 やの札



くらのやみ祭
大國魂神社の御大祭で、普通国府祭とか国司祭とか呼ばれますが、府中では、六所祭と呼んでいます。俗に「くらのやみ祭」といわれるのは、以前、真夜中に提燈だけで行なわれたためで、けんか祭・提燈まつりと、八基の神輿と祭礼の盛り上りは五月五日の神輿渡御で、八基の神輿と五台の大太鼓がくり出し、境内は二〇数万人の人出でにぎわいます。大國魂神社の祭礼には、この他に青櫛祭・榊祭・李子祭・相撲祭などがあります。

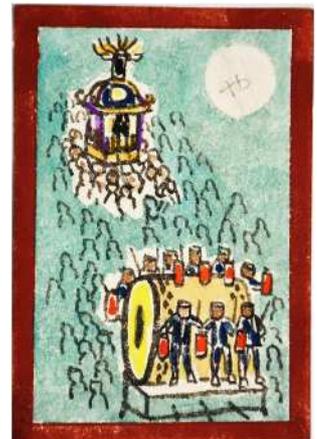


図1 - 29 まの札



府中の正月
府中（昔の府中宿の範囲）では、正月に松の代りに竹飾りを立てますが、この習俗は、大國魂神社七不思議の伝説の一つに由来するものです。大國魂大神が、府中にはじめて降りたとき、八幡様に命じて鎮座地を捜させましたが、八幡様は自分の所だけを避んで、鎮座してしまいました。大國魂大神は待ちあきて、「まつことはつらい」といいましたが、この言葉に因み、「待つ」を「松」にたとえて、松を思ひ募うようになったといわれています。

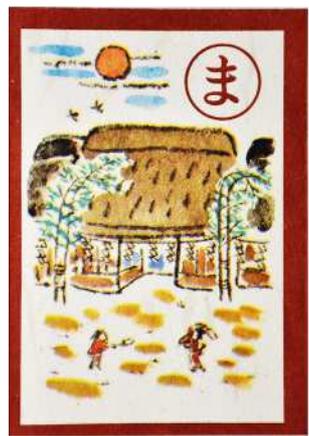


図1 - 30 けの札



京王線の開通
京王線が、新宿から府中まで開通したのは、大正五年（一九一六）のことで、明治時代以来、伸び悩んでいた府中が発展する口火となりました。それまで都心へ行く人は、櫻並木から出る馬車で、甲武鉄道（中央線）の国分寺駅へ出て、新宿へ行ったものです。京王線は大正一五年（一九二六）に、玉海電車を合併して、新宿―府中―八王子という、現在の路線となりました。



図1-31 ふの札



府中囃子
 神楽とその囃子は、次第に新しい文化の陰に姿を消していきま。現在、府中市に伝えられている府中囃子はそれほど古いものではなく、明治時代初期に、目黒囃子を習得発展させたものです。この囃子は、笛・太鼓・小太鼓一対・すり鐘・拍子木からなり、踊りには、天鼓・獅子・おかめ・ひよっとこ等の舞があります。全般にリズムミカルな調子で、観しむやすい庶民的な囃子です。



図1-32 この札



甲州街道と府中宿
 江戸幕府を開いた徳川家康は、交通運輸制度をはかるため、五街道の整備と、宿駅制の完成に努めました。その一つが甲州街道で、江戸と甲州（山梨県）を結ぶ街道です。府中宿は、この街道の宿場町で、本町・番場宿・新宿からなり、川越・相州両街道の横断きも行う、交通の要地でした。最初にできた甲州街道は、もつと南側の立川段丘屋敷に沿っていました（いさきの道）が、三代将軍家光のころ、現在のところに移ったと思われま。

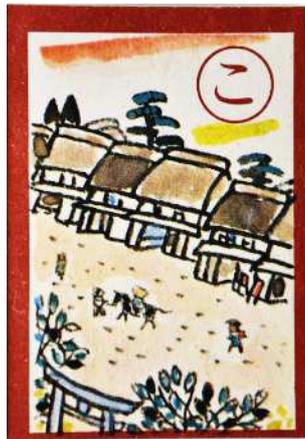


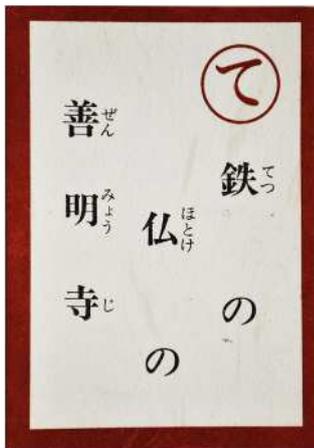
図1-33 えの札



三千人塚 都田跡
 三千人塚は、元弘三年（一二三三）の分倍河原の合戦の戦死者を埋葬したものとされていますが、塚に立っている桜碑の年号（康元元年一二五六）や、出土された遺物等からみて、分倍河原の合戦とは関係のないことがわかりました。鎌倉時代の武藏大野（鎌倉古道）は、多摩川の渡しからこの塚の前を通り、府中へと向いました。塚に立っている桜は、ちよと、近世の「里塚」のような役割をしていたのかも知れません。



図1 - 34 ての札



大鉄阿弥陀如来坐像 国重文
この仏像は、建長五年(一二五三)に鑄造され、体長約一七〇センチメートル、体重約三八〇キログラムのどっしりとした鉄仏です。府中では、「鉄仏(かなぶつ)さま」と呼んで親しまれています。国分寺の黒漆から掘り出され、江戸時代ころは、大國魂神社境内の飯屋に置かれていましたが、現在は、本町の善明寺に安置されています。また、この坐像の胎内にあったという小鉄仏阿弥陀如来立像(国重文)は、俗に「胎摩仏」と呼ばれています。



図1 - 35 あの札



高安寺
片町にある高安寺は、曹洞宗の名刹で、龍門山等持院(足利尊氏の法号)と号します。寺伝によると、昔ここに市川山見性寺という寺があったといひ、のちに、足利尊氏が国分寺にならって、安国利生の寺を国ごとに建てようとして、見性寺を再興し、龍門山高安護国禪寺と称しました。昔は、武蔵国司藤原秀郷の錫杖ともいわれ、また、弁慶の伝説も残っています。今でも、毎日朝昼晩につかれる鐘の音には、古い歴史の響きが感じられます。



図1 - 36 さの札



高林吉利 薬・市田跡
高林市左衛門吉利は、徳川家康に仕え、武蔵国多摩郡府中領の最初の代官となりました。吉利は、文禄元年(一五九二)に府中に三六〇石余の土地を与えられましたが、翌年七二才で生涯を終えているので、府中での業績については、はっきりわかりません。墓は、片町の高安寺にあります。



図1 - 37 き の 札



川崎平右衛門定孝は、押立村の名主でしたが、ききんの統いた元文五年（一七四〇）に武蔵野新田世話役となり、その才腕が認められて、代官にとりたてられました。定孝のその後の業績は偉大で、木曾川・長良川の治水工事をはじめ、産業興隆にも努めました。また、玉川上水の本害を防ぐために、堤に桜を植えました。これが有名な小金井の桜です。定孝は、明和四年（一七六七）七十四で亡くなりました。墓は、押立町の電光寺にあります。



図1 - 38 ゆ の 札



この仏像は、弘長三年（一二六二）に鑄造され、背中の刻銘から、上野国（群馬県）八幡庄にあったものと考えられます。元弘三年（一三三三）分倍河原の合戦のとき、新田義貞の一族が、守護仏として持ってきて、合戦に大勝したので、当地の築屋八幡神社に納めたものと思われます。明治時代になって、神仏分離などの事情から、現在は、白糸台の遠藤不動の境内に安置されています。



図1 - 39 め の 札



公立学校の開設
明治五年（一八七二）に学制が公布されてから、全国に公立学校が開設されはじめました。府中ではこのころ手習塾がありました。明治六年に公立学校成蹊・至誠の二学舎が開かれました。のちに、両学舎は合併して府中学校と称し、本町の安養寺を仮校舎としていました。成蹊・至誠学舎は、現在の市立第一小学校の前身です。また同年に、現在の市立第四小学校の前身である、弘道・知新学舎なども開設されました。

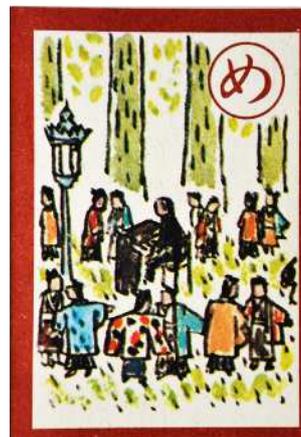
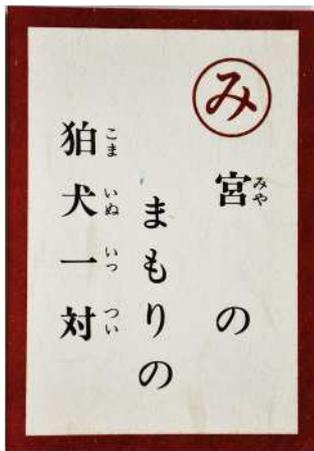


図1 - 40 みの札



本道猫犬一対 国重文

この一対の猫犬は、大國魂神社の宝物の一つで、櫛材寄木造り、漆塗り金箔仕上げのあとを残しています。高さは七センチメートルで、力強い作風から、一説に鎌倉時代の運慶の作ともいわれています。この猫犬はもと大國魂神社の拝殿と本殿の間にあった中門の両側に向いあい、神社を守護していたものです。猫犬の異形な姿を犬と思ひ、日本犬とは違っているので、異国の犬、すなわち高麗（こま）犬と呼んだのでしよう。

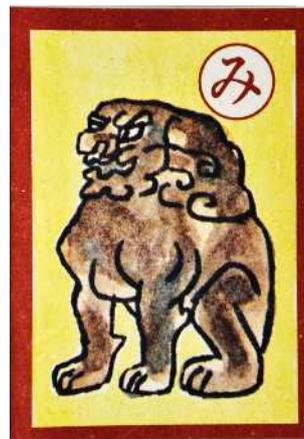


図1 - 41 しの札



品川道 品川道

品川道は、府中から東海道の品川へ通じる道だったことからついた名称です。他に笹道ともいわれるのは、多摩川に笹を流して、江戸に材木を運んでいた当時、筏人足が、府中辺にあった宿屋に泊るために、盛んに通った通筋だったため、そう呼ばれるようになったと思われまます。現在、品川道にある「一里塚」の碑は、もともとこの道にあったものではなく、この道より南側にあったものを昭和十三年（一九三八）に移したものです。



図1 - 42 ひの札



人見原古戦場 都田跡

南北朝時代の正平七年（二五二）、新田義興の子義興・義宗らが、足利尊氏と対戦した古戦場で、浅間山周回で戦われたこの人見原（金井原・小金井市）の合戦にいきます。これらの合戦は、武藏国で行なわれた南北朝最大の決戦で、太平記に記した合戦の様子は、きらびやかな鎧兜・旗巻・馬など、さながら花巻巻を見ることが出来ます。

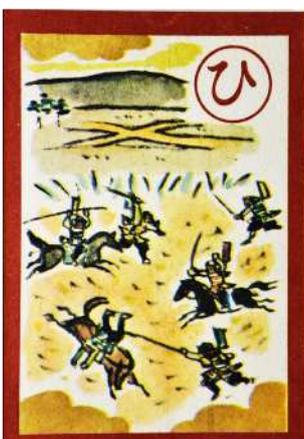


図1 - 43 もの札



浅間山
浅間山は、多摩盆地の西に続き、標高約八〇メートル府中市で一番高い所です。地層は、多摩丘陵と同じ三浦層群からなり、周囲の段丘の地質と全く異なります。ナラやクヌギなどの樹間を、シジュウカラやオナガなどいろいろな野鳥が飛びまわっています。この山を原標本採集地とするムサシノキスゲなど数多くの野生植物のほか、化石などが出土します。浅間山は、南から北へ前山・中山・浅間山(堂山)の三つの山からなっています。



図1 - 44 せの札



鎌倉街道
鎌倉時代、幕府は鎌倉から全国各地に向う道を開きましたが、武蔵国府と直通させるために整備したのが、武蔵大路的鎌倉古道です。現在の鎌倉街道とは異なる所がある。鎌倉を出た道は、小野路(町田市)までくればもうすぐ府中です。瓜生から関戸(多摩市)へ向い、多摩川を渡って右折し、下河原、芝間を経て、三千人塚の前を通って府中に入りました。鎌倉街道は、中世の府中が栄える基となった重要な道でした。

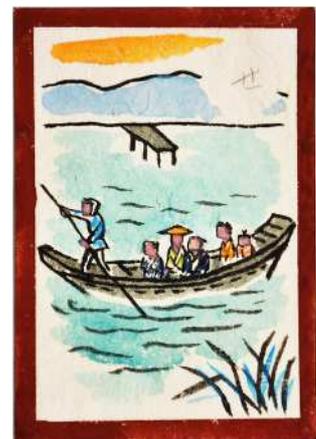


図1 - 45 すの札



片町遺跡・高倉遺跡
片町と高倉の両遺跡は、ともに奈良・平安時代の遺跡です。住居(竪穴住居)址からは、土師器や須恵器のほか、鉄器などが出土し、府中が武蔵国府として栄えた時代を偲ばせます。この両遺跡のほか、市内には東京競馬場・大國魂神社裏・武蔵野公園内遺跡などの縄文遺跡や美好町・新宿の奈良・平安時代遺跡などがあります。これらの遺跡の出土資料は、市立郷土館に展示されています。



図1 - 46 んの札



図1 - 47 予備札

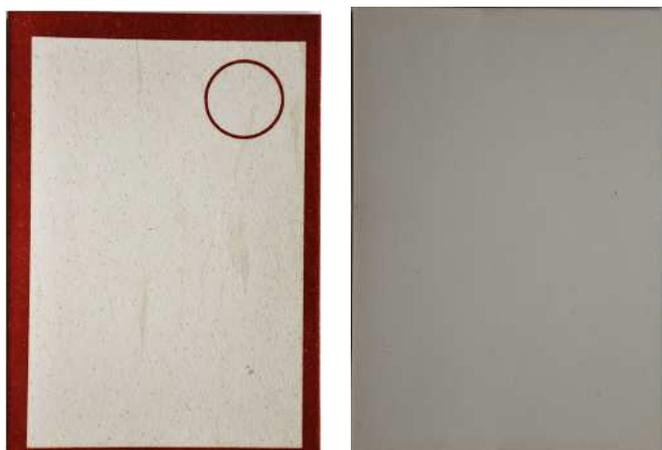


図2 武蔵府中郷土かるた 初刷 項目所在図と内容一覧

図2 - 1 武蔵府中郷土かるた 項目所在図(表)

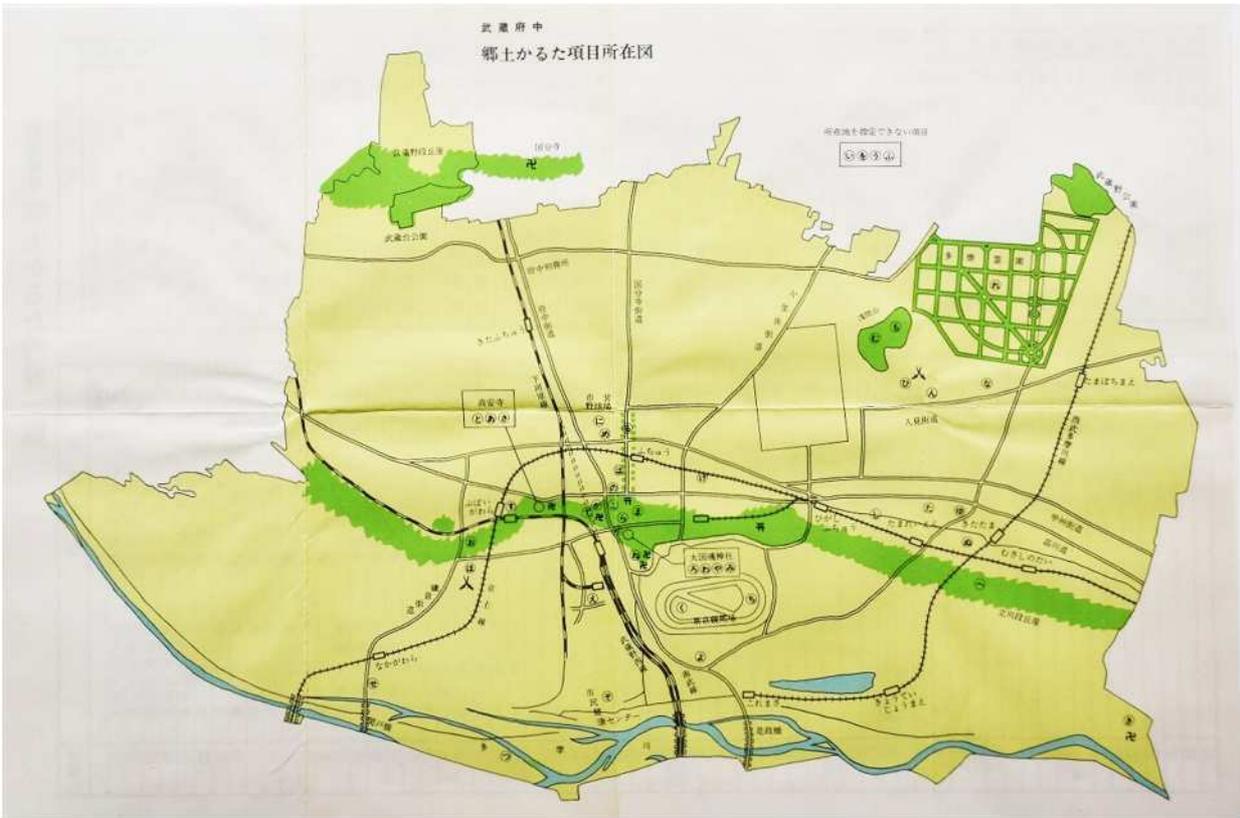


図2 - 2 武蔵府中郷土かるた 内容一覧(裏)

武蔵府中郷土かるた内容一覧	
読み札	掲載内容
いちばんはじめに武蔵の国府	大鉄仏阿弥陀如来坐像
六社あつまり武蔵の総社	小鉄仏阿弥陀如来坐像
馬場大門に馬の市	阿弥陀金剛立像
二千年連の大賀博士	木造鎧大
北条と新田の分倍古戰場	馬場大門櫓並木
平地と台地はけの道	分倍河原古戰場
地名に残る井田は政	井田旗津守墓
類のないけやきのなみ木	川崎定孝の墓
布をさらして白糸・染屋	三浦千代
自然のまもつて住みよいまち	大國魂神社
和算の学者関孝和	小山原北条免稅朱印状
横山堂の懸け仏	建弘四年の三所宮板碑
歴史がねむる公園墓地	応永六年の法華経板碑
そら行けみんな健康センター	野村瓜州の墓
つり人に夕日が赤い向山	高林吉利の墓
音色さやかな蓮華の啓	関良雪の自画像軸
七百余年の歴史の板碑	天正八年の検地帳
ランプやあんどん郷土館	文正八年の検地帳
むさしのきすげは五月のかわり	歴史
うのひばりに木はけやき	武蔵國の誕生と武蔵国府の設置
野村瓜州の四人部屋	武蔵國府の建立
黒馬まつさきとよめく競馬	武蔵總社の起源
八つのみこしに大太鼓	六町宮の起源
松を立てない正月飾り	道跡(片町・高倉道跡、その他縄文道跡等)
府中ばやしは笛太鼓	多摩川の布さし
甲州街道府中宿	地名の由来(白糸・染屋・是政・高倉など)
えのきが三千人塚	品川街道
朝鳴るかねは高安寺	甲州街道と府中宿
さいしよの代官高林吉利	府中の馬市
ゆたかな姿のあみださま	府中御前真夏瓜の栽培
明治六年学舎はひらけ	公立学校の開設
宮のまもりの狛犬一対	東京競馬場の開設
しながわ道の一里塚	府中市の誕生と発達(健康センターなど市の施設)
人見の合戦花絵巻	大立堀と二十年産
もえる若葉の浅間山	寺
関戸をわたる鎌倉街道	大國魂神社
すえ器が片町たてあな住居	高府八幡宮
天正のひびき人見の駒口	國府安養寺
	自
	府中市の地形
	自然保護と市民憲章
	市の木花鳥
	多摩雲
	浅間山
	ムサシノキスゲ
	多摩川と向山

図3 武蔵府中郷土かるた 初刷 あいさつ状

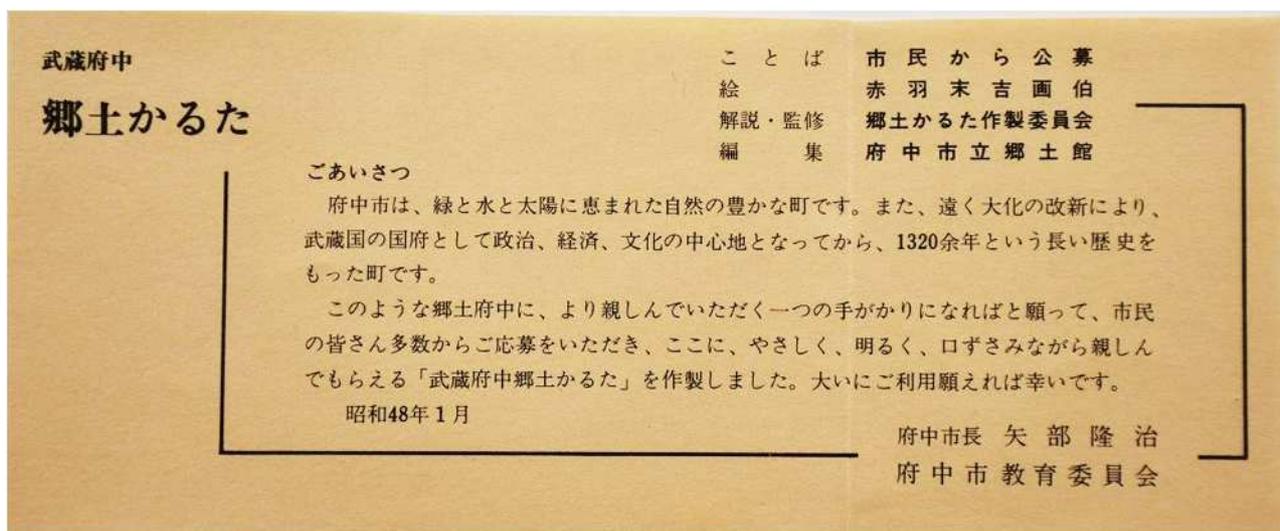


図4 武蔵府中郷土かるた 初刷 収納箱

図4 1 武蔵府中郷土かるた 収納箱 蓋(表)



図4 - 2 武蔵府中郷土かるた 収納箱 蓋(裏)



図4 - 3 武蔵府中郷土かるた 収納箱 蓋(側面)



図4 - 4 武蔵府中郷土かるた 収納箱 身(内面)



図4 - 5 武蔵府中郷土かるた 収納箱 身(外面)



図4 - 6 武蔵府中郷土かるた 収納箱 身(側面)

